

中二病騎士系転生者が  
配信をするようです

からくり丸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「我が偉大なる配信にひれ伏すがいい」

中二病騎士系転生者である神崎アンナとその同胞達は、鮮血の青騎士という名でアバターを使った動画投稿を開始する。

彼女達は人気動画投稿者になれるのか、それともマイナーで終わってしまうのか。

彼女達の戦いが今始まる。

なおそのついでに色々な困難に巻き込まれ、何故か神々の陰謀に付き合わされるとは、彼らは知るよしもなかったのである。

# 目次

プロローグ	1
第一話	9
第二話	16



# プロローグ

「我の声にふさわしき軀を所望す」

小学生の中学年の少女が胸をはる。

神崎アンナは中二病騎士系転生者である。

数多の転生をしてきた彼女にとって今回の転生では動画投稿者になろうと決断したので。

動画投稿者でもアバターを使った物であり、顔は出さないタイプのものである。

昨今の動画サイトではそう言うのも多くその流行りに乗っかる感じとそう説得された。

「はいはい、アンナちゃん

アバターは永遠騎神崎アンナ――**■****■****■**の転生者としての真の**●●●**、進藤弘幸――**■**

**■****■**が製造した**◆◆◆**であり祈りである。なお永遠騎になってしまったら転生者になつてしまうの姿ベースでいいよな」

神崎と同じくらしいの少年が笑う

進藤弘幸は物量戦争騎士系転生者ではある。

数多の転生で神や兄妹達に便利屋扱いされてる、転生者だ。

黒いところはあつたりするが世界の管理や転生者の製造などをやれる我らが次男である。

「デュフフフ、拙者も力を貸すでござるよ」

二人と同じくらいの年齢がある太った少年がどや顔をする。

やまだよしと  
山田義人は空間支配騎士系転生者である。

数多の転生で少し壊れているがそれも愛しい我らが長男である。

「……………俺は何すればいい」

小学生中学年にしては不釣り合いな仏頂面の少年が言う

おおひらまこと  
大平誠は主人公飢餓騎士系転生者だ。

数多の転生で色々と面倒な事を背負いこむ苦労人だ。

色んな事を背負ってたせいで小学生でも仏頂面になつている三男である。

たぶんこの世界でも面倒くさいことに巻き込まれるんだろうな、というのは兄妹共通の認識だ。

「僕は何でここに……………」

同じ学年で山田と進藤と同じクラスの少年は困惑する

おおいしひでひこ  
大石秀彦は改造人間である。

なりゆきとはいえ彼には悪いことをしてしまった。

とはいえ我が同胞に新しい人間が増えるのはとても喜ばしいことだ。

それはそれとしてあの悪神□キは次あつたら灸を据えねば。

「と、こんなもんでどうよ？」

仕事の早い進藤がパソコンを見せてくる。

そこには美麗で美しいアバターが写っていた。

青を基調としたフリフリのゴシックロリータで白髪に赤目すがすがしいほどの中二な感じである。

ちなみにこのパソコンは進藤のお手製ハンドメイドパソコンであり、様々なオーバーテクノロジー空間投影式スクリーンや量子転送装置、物質精製装置などが用いられている。

「流石我が魂の兄妹で、我らが工匠たる次兄よ」

「モーションも完璧でござるよ、どんな動きでもほぼ追従可能でござる」

「それは行幸だ」

そんなノリノリな3人を見て冷ややかな目で見ている人間が二人いた。

「で、俺は結局何をすればいいんだ……」

「僕の休日が……」

「とりあえずまずは録画しないとな」

一通りアバター関係が終わり進藤がそう言った

「我が勇姿を一瞬の誤差無く映し出すのが正義ではないのか」

「デユフフフフ、それをやるにしてもまずは下準備からでござるよ」

そう言うのと山田は動画サイトの一つを見せる、確か名前はM o b o v e モブウェイだったか。

世界的に有名な動画サイトでお金を稼げる、収益化もOKなサイトだ。

「実際の所動画投稿者つてのもレッドオーシャンでな、なかなかに厳しい」

そう言うのと進藤は山田のパソコンを操作する、触らずに遠隔で思考操作だ。

そこには膨大な動画があった。

「……新規は厳しいということか」

少し考えこんだ大平がそう言った。

後発組の我らがここから売れるとなるとかなりの狭き門だろう。

「そう言うことよ、誠ちゃん」

アバター方式の投稿者だけでおよそ1000、なかなかに厳しいって言うわけよ」

進藤はそう言うってアカウントデータのまとめを見せる。



とても多く目が滑ってしまった。

「では道標をしめして欲しい、我が兄妹よ」

「まあまずは動画や配信を出来るだけやることだな、最初のうちはそれこそ毎日なそれと広告を出すことだな、そしてキャラづけ

基本はこの3つだ」

3本の指を立てて進藤はそう言った。

「大変そうですね」

「そうよ、秀彦ちゃん

まああまり問題ない、なんだって俺がいるからな

広告の方も俺の趣味で稼いだお金で出せるし、何も問題ない

キャラづけに関してはアンナちゃんは十分に濃いしな、これもたぶん問題ないだろ」

進藤はおそらく全転生者の中で最高の電子戦を行えるものだ。

やろうと思えば全世界のパソコンを片手間でハッキング可能だろう。

本人はそんなことしても面白くないからとしないが。

進藤の趣味は多岐に渡るがこの場合は恐らく衣服関係だろう、なかなか人気らしい。

「アンナちゃんはただ実況すればいい」

「あとは拙者と進藤氏に任せてもらえれば」

そう言うのと二人は決めポーズをした、そこはかとなくキモかった。

「とりあえずためしに録画始めようか」

「お初にお目にかかる我が名は鮮血の青騎士、ブラッド・ブルーナイト虚空より舞い降りた一騎の騎士である」

マイク付きのヘッドセットを着けた神崎は椅子から立ち上がり、そういいつつ決めポーズを取る。

ちなみにここは亜空間に精製した音声スタジオだ、大声出しても何も怒られることはない。

ちなみにネットや電波は繋がっているし、やろうと思えばどのような場所にも出来る。

「OK、そっちはどうだ」

「バッテリーは問題なく動いてる」

「カメラ、画面キャプチャOKです」

「デユフフフ、音声問題無しですぞ」

ちなみに彼らがやっていることはやろうと思えば進藤一人でも出来るがあえてそれはずに楽しむことを重点している。

せつかくの人生であり、皆で楽しむことが大事なのだ。

「……であるから、皆の者にはチャンネル登録を所望す」

と、最後に言葉を終えて初めての動画作成は終わる。

「OK、最初だしこんなもんか？」

アンナちゃん10分休憩したら続いて実況動画を取る、問題はないか」

撮った動画を何回か確認したあとに進藤はそう言葉を発する。

「問題ない」

飲み物を飲みながら神崎はそう言った。

「この時間で神崎氏が今回やるソフトの説明をするでござるよ

今回やるソフトはこれでござる」

神崎の目の前に机とパソコンが出現する。

山田が手元にあるパソコンを操作すると魔法っ娘な女の子が中央に陣取るファン

シーな画面にパソコンの画面が変わった。

「フォーチュンウィッチ魔法少女バトルロイヤルか」

「拙者と進藤氏、大石氏がここ最近嵌まったバトルロイヤル系のソフトで人気がある奴

でござる

元は女の子向けバトルロイヤルソフトだったらしいでござるがリリースしたら大人

のお友達からかなりウケたソフトでござる

」

「流石に年齢が年齢だからな、血が出るのは辞めた方がいいと思つてな

他にもフォートレスやモールとかも選択肢だったが今回は此方にした」

フォートレスは低年齢も遊べる、バトルロイヤルで有名なソフトだ、クラスメイト達にもよく話題に上がつてゐる奴だ。

モールも有名なソフトでプレイヤーが色々なアイテムを作つて冒険する作品だ。

「なるほど、なかなか面白そうだ

我が偉大なる一步はここから始まるのだ」

「よし、撮影を始めるぞ

3、2、1、スタート」

そして物語は始まる。

# 第一話

「とりあえず再生数1000は行って、チャンネル登録者は50人いけたか」

動画投稿をした日の夜、動画投稿してから数時間程で再生数が1000を行ったことを確認した進藤は安堵する。

チャンネル登録者も悪くない。

「デユフフフ、悪くないスタートは切れたでござるな」

パソコンの何個もあるタブの一つから聞こえる山田の声に同意する。

夜は小学生であるからして流石に家を出ることは叶わない。

まあやろうと思えばいくらでも出来るのだがよっぽどのがない限り、今のところそんな能力は使わない方針だ。

「二人が言うならば、我はプレリユードを遂行できたということか」

「そうだ、明日も学校が終わったら動画投稿をするぞ」

「それではしばしの眠りにつかせてもらう」

「落ちるでござるよ」

「おう、おやすみ」

その言葉と共に2つのタブが閉じられる。

そのままパソコンの電源を切ると進藤は懐から携帯端末を出す。

ピポパポと番号を押して耳に当てる。

「もしもし、あおばちゃん、そっちはどう？」

「ふーん、なるほど」

「うーん、相手の手が見えないのが困るな、おそらく世界法則を塗り替えるやつだと思うけど」

ここまで隠蔽されてるとなると他の主神クラスも関わってそうだ

情報ありがとうね、あおばちゃん」

進藤は通話を切る。

「バカンスの筈だったんだけどな、これから忙しくなりそうだ」

その独り言をボソリと呟くと進藤は布団に入るのであった。

「我の術を見るがいい」

神崎の操るキャラが別のプレイヤーのキャラを倒す。

最初のうちは操作に慣れていなく、低順位が目立ったが今ではある程度は安定して順位をあげることができた。

このゲームの基本はよくあるバトルロイヤルと一緒に装備をかき集めて一位を狙うというものだ。

ただ他のバトルロイヤルと違い銃は殆ど存在せず、かわりに魔法やマジカルステッキ、近接武器などが大量に追加されている。

「ハツハツハツハツどうだ、このライトニングパニッシャーの味は」

神崎が好んで使うのは雷属性の魔法で、発生 of 速さと弾速の速さに定評があり、使いやすい魔法が多い属性だ。

なおライトニングパニッシャーと言ってるがゲームにそんなものは無く、今撃ってるのはライトニングショットという前方に電気の弾を飛ばすという魔法である。

「クツクツクこの鮮血ブラッド・ブルーナイトの青騎士の魔の手から逃れられぬ」

そんな言葉を言ってるが画面では魔法の撃ち合いでだいぶ消耗しており、はかば強がりだ。

「なんだそれは?! 我が術が効かぬだと、ええい……不覚!」

その言葉を最後に神崎のキャラが魔法盾によって守られピコピコハンマーで殴り続けられ、やられてしまう。

そして23位とパソコンの画面に表示された。

そこで一旦録画が打ち切られる。

「なかなか面白いではないか」

「シールドを持った相手と真正面からやりあうなら引き撃ち安定でござるよ

あれは迎え撃つにはいいでござるが追い討ちには向かないものでござるからな」

山田はそう言うのと神崎にスポーツドリンクを渡す。

「パルティアンショットという訳か」

「そう言うことでござる、神崎氏は筋がいいでござるからもう少し頑張れば一位も十分取れるでござる」

そう言うのと山田は自身の持ち場に戻った。

ちなみに今このスタジオにいるのは山田と神崎だけだ。

大平と大石の二人は部活であり、本来来る筈だった進藤はなにやら用事との事だった。

「とりあえず次のマッチ終わったら終了でござるよ、これ以上は親も心配するでござるからな」

もう時間は5時もすぎしており、夏に入って日が伸びたと言っても6時までには帰らねば少し不味い。



「それではゆくぞ」

その声と共に録画が始まったのであった。

「三人か、初動はまずは安心か」

よくあるバトルロイヤルゲームでプレイヤーが場所を選んで降下するという要素はこのゲームでは少し違う。

まずは全体マップが表示され、場所を選ぶとそこに転移するという方式だ。

全体マップは9つの地域にわかれ、その地域を何人のプレイヤーが選んだか表示される。

神崎が選んだのは物資がそこまで多くない代わりにヘイトが少ない地域で今回はその選択は成功したようだ。

「悪くない装備だ、<sup>ライイトニング</sup>パニッシュャーに<sup>デアザスター</sup>ハンマーに<sup>鉄</sup>の鉄棒か」  
とりあえずかき集めた装備は悪くない装備だ。

ボムはグレネードのようなものでよくあるゲームのグレネードとは違い威力はさほどではないが閉所ではかなりの強さを発揮する。

そのなかでアイスボムは敵のスピードを落とせる範囲デバフも撒くことで、とりあえず敵のいるところに投げられる強装備だ。

鉄パイプがあれば嬉しい程度近接装備だ、振りの速さと軽さが長所で魔力ゲージになつた際の最終手段だ。

「もうそろそろ移動しなくては」

バトルロイヤルゲームでよくある範囲縮小の時間が刻一刻とせまっていた。

残り人数を確認すると派手な潰しあいはどこかでしていたのか43人と最初は10人だったのに半分以下に落ちていた。

移動手段は徒歩か持つていれば飛行魔法による移動だ。

なお飛行魔法は強いと運営は思ってるがレアなものにとっても目立つ、集中攻撃される、不意に範囲縮小のバリアに引つかかる、そもそもゲージ消費がわりと激しいと見かけることは少なく運営と想定してたのと違い不人気魔法である。

「ハツハツハツハッこの輝<sup>フ</sup>きの翼<sup>ライ</sup>の速さにおののくがいい」

神崎が使つたのはその飛行魔法である。

神崎のキャラがふわりと浮かぶと安全な領域に逃げようと移動する。

だがそのあまりに目立つそれに対し何人か反応したようで撃ち落とさんと魔法を放つ。

「遅い、遅いぞ」

ジグザグに動き、不規則な移動で相手を攪乱し、それによって起きるゲージ消費は

ポーションを飲んで解決する。

そんな感じで何度か避けると諦めたのか魔法の数が減る。

少しずつ降下し、降りようとしてる矢先それは起きた。

パンパンパン

発砲音が鳴る。

その音とともにすごい勢いでHPが減り神崎のキャラがやられてしまった。

順位が表示される、32位と。

このゲームで銃少ない銃に撃たれたらしい。

「なんだとー!?!」

その言葉と共に録画は終わるのだった。

## 第二話

「進藤氏がなにやら動いてるでござるが……」

「あの人は……、いつもこうです」

でも聞いてもはぐらかすでしょうし」

「……あつ、元に戻らないといけませんね」

「あの一件で、使ってしまったからか、もうずっとこの調子ですね」

義叔父も困ったものです」

「あの子達に気づかれなければいいですけど」

新しい妹もいるし暴走しないか、心配です」

「配信だよー、アンナちゃん」

「ご武運を祈ります」

「……応援している」

「頑張ってください」

「うむ、私の力を見せてくれよう」

再生数、登録者数が増えてきた、日曜日朝。

神崎と4人にとって初めての配信が始まるうとしていた。

だがその中で一つ普段とは違う相違点があった。

「？、どうかされましたか」

あつ大石さんに落ち着いた状態で見せるのは初めてでしたね

ここ最近ちよつと制御効きづらくなってしまつてこのようなことに」

いつも山田がいる位置に居るのは白銀の髪と豊満な胸の白いゴスロリ服を着た女性  
がいた。

「あ、いや、なんでも……うわああああ機界換装」

その胸を見て大石は慌てて目をそらす。

少し見とれてたのは隠せそうになかつた。

顔が真っ赤になり、逃れたいと思い、言葉を口にする。

その瞬間大石が赤黒い光に包まれる。

光が収まるとそこには黒と所々が赤の髪で腕と鞆に入った剣を封印するかのよう  
に布でぐるぐる巻きにしたのが印象的な武者鎧の姿の少女がいた。

「その胸を削いでやろうか?」「スレイ、それは辞めて」

「えーと、年頃の男の子なら仕方ないですよ、むしろそこまで弄くられてるのにちやんと反応出来てる時点ですごいですよ」

「フオロー?フオローなのソレ!?!」

その少女から三人の少女の声が出る。

ひとつは変身した大石のもので、残りはその身とともにある二つの祈り。

魔剣、ダーイン・スレヴと永遠機<sup>エタマキナ</sup>■■■■が製造したものの、これと融合することで永

遠騎になる、そのさまは人柱かあるいは契約か、ゆきかぜ。

ちなみにそう言ってるが十分以上にデカイ、どことは言わないが。

「秀彦ちゃんも若いねー、換装」

その言葉とともに進藤の身にも赤い光に包まれる。

そこに居たのは赤いゴスロリ服と室内なのに何故か出した大きな傘が目を引き赤髪の少女だった。

「……この流れは俺もしなければならぬということか、換装」

やれやれと言った感じで大平は眩くと、黒い光を纏う。

背が異様に高い、帽子を被った黒いゴスロリの女性に変わる。

「我も真の力の一部を解放しよう、機界換装!!」

光とともに神崎の姿は消え、白髪に青いゴスロリ衣装、神崎のアバターに似た姿と  
なつて表れる。

「うむ、この姿で配信というのはなかなかにたぎるな！」

そう言うのと神崎は席に座るとマイク付きのヘッドセットを付け、パソコンを操作して  
いく。

いつもと違い思考操作できる端末も準備されており、これで音量などを調整する予定  
だ。

「11時から13時まできっかり2時間の配信だよ、アンナちゃん」

「まず、構成ですが最初の10分ほどは挨拶と軽い雑談、その後フォーチュンウィッチを  
やっつけていきます」

「了解だ」

「マイクテストお願いします」

「我が声を聞くがいい」

「マイク、大丈夫です」

「……」（パソコンを叩く音）

準備が矢継ぎ早に進み、配信の時を迎える。

「こんにちは、諸君、我が配信に来てくれて、感謝する」

神崎のその言葉ともに配信が始まる。

ちなみに姿は変わっても違和感が無いように声はそのままである。

《はこつ》

《↑鮮血の青き騎士↑さんオツスオツス》

《こんにちは》

《オツス、いいロリ声ですこと》

そう次々にコメントが書かれる。

「コメント感謝する、これから我が配信でやるソフトは実況動画を出させて貰ってる  
フオーチウンウイツチだ

我が美技に酔いしれるがよい」

《美技（実況動画中クイーン一位になれたのは一回のみ）》

《美技（うまいとは言つてない）》

《あー生ロリ声最高だわ》

「今のところは順調だな」

「変なのは居ますが想定範囲内ですな」

コメント欄を見ながら進藤と山田はそれぞれにコメントを出す。



「この様子なら大丈夫だな、でも一応義人ちゃんは火消しの待機しといて」  
「わかりました」

パソコンでコメントで配信にバレずらいように合いの手を入れる。

ちなみにこれは神崎にも話を通して念の為と説明してある。

とはいえ一部変なのを除き、コメントの雰囲気もよく、このままで問題ないだろう。

「むう、これ不味いな」

《あつ（察し）》

《これは出落ちコースですわ》

あちらではフォーチュンウィッチの実況が始まったようだ。

なお初っぱなからうっかり激戦区に行ってしまう、かなりいや非常に厳しいだろう。

「まだだ、まだ我が命運は終わってない、我が力を見るがよい」

《屑運すぎるwww》

《激戦区でパイプだけはつれーわ》

《言うて他のバトロワ系と違って室内戦ならワンチャンあるっしょ》

どうやら初手の物漁りでは鉄パイプしか引けなかったようで、ある意味すごい美味しい展開ではある。

「ここに活路を見いださん」

神崎のキャラが鉄パイプ片手に室内での待ち伏せの選択をする。

激戦区であるゆえに待ち伏せの成功率は高い、外での不意の遭遇戦に比べれば勝率は高いだろう。

そして扉を開ける音がする。

そこに入ってきたのはそこその装備のキャラ、魔法は不明だが身なりからして近接装備は装備してない可能性が高い。

表示されない暗器やナイフと言った可能性はあるがこちらが先手なら大体の物は大丈夫な筈である。

「食らえ、我が一撃、ブランドストライク」

《やったか!?!》

鉄パイプを振り下ろし、相手のキャラを打ち据える。

だが相手も反応が早く逃げようとする。

「ええい、逃げるな」

《漁夫られそう》

《相手に引き撃ちされてないからまだマシだな》

追うものと追われるものだがそれも唐突に終わる。

「なんだとおおおお」

《今日初なんだと、いただきました》

《漁夫られましたね》

《あー本当口リ声最高だわ》

逃げていた方のキャラが横から発射された魔法によってやられると、その次に神崎のキャラに対して魔法が発射される。

なんとか避けるがそのまま追いかけられあえなくやられてしまったのだ。

とはいえ配信は続く、すぐさま神崎は切り替えすぐさまもう一度マッチングできるよ  
うにする。

「今宵の戦いは命運がなかったは次こそはいかせてもらおう」

《さっきのは初手で運なかったからしゃーない》

《がんば》

《この配信でクイーンに何回なることが出来るのか》

《初見です、こんちや》

「初見さん、こんにちは、我が配信に来てくれて感謝する」

日曜ということもあるのだろうか、配信は好調だ。

事前や今でも広告も打っていたおかげか初見の人間も来ており、チャンネル登録者も

増えていた。

《青騎士さんいくつなん?》

《すごいヌルヌルですね、パソコン何使ってます?》

《アバターの出来いいっすね》

「我が年齢は秘密だ、アバターとパソコンは我が友謹製だ、あやつも喜ぶだろう」

《友人すげーなおい》

《企業産と遜色ないんですがそれは》

《あの一そんな友人お金どれくらい積めば手に入るんですか?》

操作しつつ、質問に対しても素早く答えていく。

大半の質問は想定出来たのであらかじめ用意してたものだ。

今回はなかなか良いところに出れたようである程度の装備を整えられることが出来た。

「遅い、遅い」

《これはいけそう》

《頑張れー》

《他の相手がよほど上振れしてなきや十分狙える》

今回はその勢いのまま一位を狙えそうで、敵も倒していき装備を整えていく。

そして30、20、10と減っていき、最後の2人に残る。

「唸れ、我が氷炎よ！、ハーハッハ大勝利だ」

《おめ》

《おめでとう》

《トライ2回目でクイーンおめ》

神崎のキャラが魔法で最後の敵を倒し、一位になる。

そして配信の時間は過ぎていく。

「これで、今日の配信は終了する、楽しんでいただけたのならチャンネル登録と高評価を頼むぞ」

《お疲れ様です》

《乙、応援するわ》

配信はそのまま順調に終わる。

ヘッドセットを取り、パソコンをシャットダウンするとふうと神崎は息を吐き、ス  
ポーツドリンクを一気に飲み干す。

「なかなか疲れな」

「……お疲れ様だ」

「お疲れ様です」

「私の配信はどうだった？」

「……問題ない、良かったと思うぞ」

「良かったですよ、神崎さん」

此方の方に向かって来た、大平と山田のその言葉を神崎は安堵すると机に突っ伏す。

「行儀がわるいぞ、アンナちゃん」

そう言うに進藤は虚空から椅子と大きな円形のテーブルを作りだす。

「初配信終了お疲れ様ってな」

「感謝する、我が次兄よ」

神崎は立ち上がると座る。

他の面々も座り、進藤がパンパンと手を叩くと虚空からメイド服を着た女性が出て来る。

それは一見見ると人のようだが細部が人ではなかった。

あるものは耳がアンテナのようなものになっていたり、間接や手などが人形のような間接になっていた。

「これが進藤さんの永遠兵」  
エタマドールズ

「此方、お飲み物になります」

大石がそう呟いてると目の前に飲み物が出される。

透明な液体に泡が浮かんで、炭酸水のようにだった。

「さすがに酒を出す訳にはいかないからな、今日はお疲れ様でした、乾杯」

「「「乾杯」」」

配信の成功を祝い、全員がその飲み物を飲み干すのだった。